

IMAGE LIBRARY NEWS 第25号 (web)

(内容の一部を別表・編集しております。名称・役職名等は掲載当時のものです。)

CONTENTS

・「映画を見る」ということ



IMAGE LIBRARY NEWS 第25号表紙

「映画を見る」ということ

文＝木村美佐子（イメーライブラリー・スタッフ）

映画『女と男のいる舗道』の中に、アンナ・カーリーナ演じる主人公ナナが映画館に立ち寄る有名なシーンがある。上映作品はカール・ドレイヤー監督の『裁かるゝジャンヌ』。映画館の暗がりの中で、ナナはフィルムが放つ光を一身に浴びる。その瞳からは、スクリーンに映し出される悲劇のヒロイン、ジャンヌ・ダルクと同様に大粒の涙がこぼれおちる。映画館を出てからも、ジャンヌとの相似が引き継がれたかのように、ナナは転落の一途をたどる。

映画には人生を変えてしまう魔力がある。『フランケンシュタイン』をくいているように見つめる少女アナも（『ミツパチのささやき』）、『カサブランカ』をこよなく愛するうだつのあがらない映画批評家も（『ボギー！俺も男だ』）、それぞれ映画の幻影に寄り添われる。彼らのようにフランケンシュタインと心を通じ合わせたり、ハンフリー・ボガートから人生のアドバイスを受けたいのなら、私たちは映画館に足を運ばなければならない。映画のイニシエーションはいつでも映画館で達成されるからだ。

今日では携帯電話で簡単に映画を見ることも可能だが、映画誕生の瞬間を振り返れば、携帯の小さなディスプレイがどれほど「映画」にそぐわないかがよくわかる。映画史の起点は1895年12月28日。その日、リュミエール兄弟が開発したシネマトグラフによるフィルム上映がパリのグラン・カフェで開催された。そこで上映された10本ほどの作品の中で、最初に上映された『工場の出口』が、世界初の映画といわれている。

しかしそれ以前にも、人間は自らの視覚を満足させるために多くの映像にまつわる玩具や装置を発明していた。17世紀末に写生に利用されたカメラ・オブスクーラもそのひとつ。カメラ・オブスクーラの内部では、小穴から差し込む光が外の風景の上下左右さかさまの像を結ぶ。画家たちはその中を覗き込み、そこに投影された像をなぞることによって、風景の正確な遠近感を表現することができた。写実用カメラの原点、つまりは映画用カメラの原点でもあるその暗箱は、映写室の小窓からフィルムが投影される映画館の内部とそっくりだ。

『工場の出口』の直前、1891年にエジソンが発明したキネトスコープは、箱の内部でフィルムが廻るのを覗き見る装置だ。シカゴ万国博覧会にも出展されたキネトスコープは世界的な人気を博したが、「映画」にはなり得なかった。工場の出口から出てくる人々の姿を捉えただけの素朴な映像を「映画」たらしめた要素とは、大きなスクリーンに投影されたその映像を多くの観客たちが同時に共有したからにはほかならない。1895年という年が映画の歴史において華々しい輝きを保持し続けるのは、「動く写真」が投影というシステムを手に入れたからなのだ。暗闇の中で感覚をどぎすまし、見知らぬ人たちとともに映像を見るという非日常的な体験こそが映画の醍醐味といえる。

手軽に映画を見られる、もしくは作れてしまう時代だからこそ映画評論家のコメントは辛口だ。カイエ・デュ・シネマ誌の編集長であるジャン＝ミシェル・フロドン氏は、現代の氾濫する映像を「映画の実践」ではなく「オーディオビジュアルの実践」とし、「上映されたいという欲求を持っているものが映画なのだ」と語っている（*1）。また、2008年にイメーライブラリーの講座で講演していただいた梅本洋一氏も、こんな言葉を残してくれた。「DVDで見るのは画集で見るのと同じです。（略）画集で見ればいろんなことを覚えられるし、いろんな知識も得られるけど、本物を見た方がいい。」（*2）

息をひそめ微動だもせず、『女と男のいる舗道』のナナはスクリーンを見つめる。彼女の瞳に映るのは、大きく引き伸ばされることで初めて肉眼にさらされるフィルムのマチエール、闇から光までをつなぐ銀粒子の繊細な筆致——本物の『裁かるゝジャンヌ』だ。

映画という身体的体験を得るためには、暗箱の中を覗くのではなく、彼女と同じように、自分自身がそのシステムの内部に入るしかない。暗箱の世界の住人になるしかないのだ。そのとき初めて、映画は私たちに至福の瞬間を与えてくれる。

(*1) 映画美学校において2009年1月29日に開催された講演「映像配信の時代における映画上映について」より引用。

(*2) 第29回イメーライブラリー課外講座「ヌーヴェルヴァーグ再考」より引用。

.....
武蔵野美術大学 美術館・図書館 イメージライブラリー

〒 187-8505 東京都小平市小川町 1-736

TEL : 042-342-6072

MAIL : imagelib@musabi.ac.jp

©2009 Musashino Art University Museum & Library All Right Rerved.

セルロイドの夢 - フィルムで観る NFB アニメーション

イメージライブラリーでは NFB の映像作品を数多く収蔵しています。NFB (The National Film Board of Canada) は、1939 年に設立されたカナダの国立映画制作機関で、広い国土に分散する多様な文化背景を持つ国民に向けてアニメーションやドキュメンタリーなど様々なジャンルの映画制作を行っています。第 31 回映像講座「セルロイドの夢-フィルムで観る NFB アニメーション」では、これらの収蔵作品からピックアップしたアニメーション作品の 16mm フィルム上映をいたします。

お知らせ

造形研究センター第 31 回映像講座
「セルロイドの夢-フィルムで観る NFB アニメーション」を開催いたします。

日時：2009.6.29 (mon) 16:40 ~

会場：1 号館 104 教室

講師：西本企良 (視覚伝達デザイン学
科教授、造形研究センター研究者)

NFB のアニメーション作品は、言葉やストーリーではない別のものによっていきいきと私たちに語りかけます。それは光や色彩、そして「動き」そのものです。砂や切り絵によって表現された鳥の羽ばたきを見ている時、その色彩や羽ばたきの動きそのものに心を捕らえられ、ストーリーなど忘れてしまう瞬間が何度もあります。

こうした色彩や動きといったものに対する感覚、物事が持つ意味とは関係のないところの、言葉で言い表せない何かいきいきとしたものに心を動かされるという体験は、誰もが幼い頃に経験したことがあるのではないのでしょうか。まだ電車が乗り物だと知らなかった頃、私たちの目に電車はただの動く四角い物体として映っていました。それは限りなく魅力的なものでした。大人になり、目の前に現れる様々な物事に對し、それをただ感じる前に意味を了解してしまうことが当たり前になった頃には、そんな風にもものを見つめ心を動かされるという体験は少なくなりました。

NFB の作家たちは、このような誰もがかつて持っていた眼差しの力を信じ、映像によって多様な言語と文化が混在する自国の人々の心へ幅広く訴えようとしました。共通の価値や意味が簡単に見いだせない場所、唯一人々が共有できるのは言葉や意味以前の「感じる」という共有体験であり、それは価値観の差異を超えて誰もが持ち得る「見る喜び」の原体験です。NFB のアニメーションの色彩やいきいきとした動きの美しさはそうした想いに支えられています。

今回の映像講座では、NFB アニメーションの 16mm フィルム上映を行います。上映会場へ足を運び、大きなスクリーンに投影された映像を暗闇の中で大勢の人と一緒に座って見ることには、携帯電話やテレビで見ることの便利さや手軽さはないかもしれません。小さい画面はストーリーを追い、映し出された物事を理解するには大変便利ではありませんが、NFB の作家たちの描いた世界を感じるためにはかえって遠回りのように思えます。それは見ることはじまじりか理解することではなく、「感じる」という身体的な体験にあるからです。大きなスクリーンで映像を見ることは、映し出された映像に身体を委ねることです。それは私たちの記憶の底辺にある、見ることの体験、つまり「感じる」ことへ回帰する近道になるのではないのでしょうか。

今回の上映は、視覚情報が過剰に溢れる今だからこそ、立ち止まって「見る」との出発点に立ち帰り、情報に埋もれて見つけづらくなっている意味以前の世界の豊かさを見つめなおす機会になると思います。(文：久保田桂子)

垂直線

1960 年 / ノーマン・マクラレン、イブリン・ランバート / 5 分 50 秒

画面に現れた一本の垂直線が動きながら数本に分離していく。平面の画面にやがて奥行きのある広い空間が現れ、そこで垂直線たちが優美に踊るように運動する。

モザイク

1965 年 / ノーマン・マクラレン、イブリン・ランバート / 5 分

「垂直線」と同様に、シンプルな正方形の図形が動きだし、分離していく。やがて「垂直線」よりさらに奥深い空間と、その中に美しく運動するモザイクが立ち上がる。

シリンクス

1965 年 / ライアン・ラーキン / 2 分 54 秒

美しい水の精は牧神からの求愛を拒んだ末、自ら葦へと変身する。木炭の濃淡の中に浮かび上がる白は、冷たく滑らかな陶器の肌触りを思わせる。

パ・ドウ・ドウ

1968 年 / ノーマン・マクラレン / 13 分 22 秒

踊る男女のシルエットが、闇の中で光に照らされて浮かび上がる。フィルムに多重露光することにより、身体の流れるラインの軌跡が幾重にも重なり、画面に神秘的な像を結ぶ。

がちょうと結婚したふくろう

1974 年 / キャロライン・リーフ / 7 分 38 秒

イヌイットの民話を題材にした作品。音は彼らが狩りで使う動物寄せの鳴き真似を用いている。砂絵の柔らかいタッチのアニメーション技術により、砂粒の重さが翼の羽ばたきの軽やかさへと変化する。

